

# 曹沫像の変遷

－賢人から刺客へ－

太 田 麻 衣 子

## はじめに

『史記』巻八十六刺客列伝には五人の刺客が登場する。その先陣をきる曹沫は、魯の將軍として齊と戦うも敗北をかさね、会盟の場で桓公に刃をつきつけることによって、奪われた国土を一朝にしてとりもどした人物だとされている。

これが曹沫にかんするもっとも一般的な認識であることはいうまでもないが、じつは『史記』によってこうした曹沫像が確立されるまでには、これとはまたべつの曹沫像が存在していた。『史記』に先行する諸文献に『史記』とは異なる曹沫のエピソードがのこっていること、そして史料によってはかれを「曹劌」や「曹翹」などと記すこともあることは『史記索隱』に代表される諸注によってはやくから指摘されているが<sup>1</sup>、そうした各種の曹沫像がどのように変化していった結果に『史記』における曹沫像が誕生したのかということについては、管見のかぎりこれまで議論されてきていない。

そもそも宮崎市定氏がつとに指摘するように、『史記』には伝説がものがたり化したようなエピソードが多々収録されており、なかには舞台演劇の筋書きだったのではないと思われるものさえある<sup>2</sup>。刺客列伝の記述もその類にもれず、『史記』に先行する諸文献と比較してみれば、そこに挙げられた刺客たちの人物像がずいぶんと脚色されたものであったことが浮かびあがってくるのである。刺客はいわば任侠の一種であり、任侠的習俗が戦国秦漢期の社会における重要な一要素であったことはいうまでもないが、では、そうした刺客たちの人物像は、いったいどのようにして形成されてきたものだったのだろうか。それを探ることにより、中国古代社会の一側面をあきらかにすることができるのではないか。そうした思いから、本稿では手はじめに『史記』に描かれた曹沫像がどのようにして形成されてきたものなのかを考察してみることにはしたい。

---

1 出土史料も含めた曹沫の名のヴァリエーションおよび各字が通假関係にあることは、馬承源主編『上海博物館藏戦国楚竹書（四）』（上海古籍出版社、2004年）の243頁、および廖名春「楚竹書《曹沫之陣》与《慎子》佚文」（簡帛研究網站、2005年2月12日）を参照。

2 宮崎市定『史記を語る』（岩波書店、1979年。『宮崎市定全集』5（岩波書店、1991）に再録）、「列伝」。

## 一、さまざまな曹沫像

曹沫にかんするエピソードを載せるものには『左伝』や『国語』、『管子』や『呂氏春秋』などさまざまなものがあるが、それらのなかには成書年代が戦国から漢代にかけてとおおまかにしか推定できないものが多く、『史記』に先行する史料であるか否かがいまひとつ判然としないばあいが多くない。また、なかには『戦国策』や『新序』のように、『史記』よりもあとに編纂されたものであっても、『史記』が成立するよりもまえからすでに存在していたエピソードを収録しているものもある<sup>3</sup>。各史料の成立については次章でくわしく述べるが、本章ではひとまず『史記』よりもあとに誕生したエピソードであることが明白でないかぎりには『史記』に先行する可能性があるものとみて考察の対象とすることにし、各史料に描かれた曹沫像をひとつひとつ確認してみることにはしたい。

### ①『史記』にみえる曹沫像

まず、曹沫は『史記』ではどのように描かれているのかというと、刺客列伝には、曹沫者魯人也、以勇力事魯莊公。莊公好力、曹沫爲魯將與齊戰、三敗北。魯莊公懼、乃獻遂邑之地以和、猶復以爲將。齊桓公許與魯會于柯而盟。桓公與莊公既盟於壇上、曹沫執匕首劫齊桓公。桓公左右莫敢動、而問曰、子將何欲。曹沫曰、齊強魯弱、而大國侵魯亦甚矣。今魯城壞、即壓齊境。君其圖之。桓公乃許盡歸魯之侵地。既已言、曹沫投其匕首下壇、北面就羣臣之位、顏色不變、辭令如故。桓公怒、欲倍其約、管仲曰、不可。夫貪小利以自快、棄信於諸侯、失天下之援。不如與之。於是桓公乃遂割魯侵地、曹沫三戰所亡地盡復予魯。(曹沫という者は魯人であり、勇猛で気骨があることをうりに魯の莊公に仕えていた。莊公は勇力な者を好み、曹沫は魯の將軍となって齊と戦ったが、三回敗北した。魯の莊公は恐れおののいて、遂邑の土地を献上して和平を結ぼうとしたが、やはりもう一度(曹沫を)將軍とした。齊の桓公は(和平を)受けいれて魯と柯で会盟をおこなった。桓公と莊公が壇上で誓約しおえると、曹沫は匕首を手に齊の桓公をおどした。桓公の側近は(君主を人質にとられて)どうしても動くことができなかったので、(桓公は)「あなたはなにを要求するつもりなのか」と問いただした。曹沫が「齊は強く魯は弱く、しかも大國(である齊)が魯を侵略することもまた度が過ぎてひどい。いま魯の城壁は壊され、齊との国境が(国都のすぐそばまで)迫っている。どうかこのことを考慮されたい」といったので、そこで桓公は侵略した魯の土地をすべて返却することを承

---

3 『戦国策』や『新序』は劉向が宮中の蔵書のなかから故事・逸事を整理・編纂したものといわれるが、馬王堆漢墓から出土した『戦国縦横家書』と『戦国策』の記述に一致するところがあるように、個々のエピソードのなかには『史記』が成立するよりもまえから存在していたことが確認できるものもある。

諾した。(桓公が)言いおえると、曹沫は匕首を投げすて壇上から降り、北面して群臣の席についたが、顔色に変化はなく、言葉遣いも元どおりだった。桓公は怒り、(あとから)約束に背こうとしたが、管仲は「なりません。小さな利益をむさぼって自分の気持ちを満たそうとすれば、諸侯からの信頼を棄て、天下からの援助を失うことになります。約束を守るにこしたことはございません」といった。そこで桓公はようやく魯に侵略した土地を割譲し、曹沫が三回戦って失った土地をすべて魯に返した。)

と記されている。このほかにも『史記』卷十四十二諸侯年表・同卷三十二齊太公世家・同卷三十三魯周公世家・同卷六十二管晏列伝・同卷八十三魯仲連鄒陽列伝(以下、魯仲連列伝)・同卷一百三十太史公自序に曹沫にかんする記述があるが、それらのなかに齟齬はみられず、『史記』のなかで曹沫は一貫して「齊に敗北をかさねるも、桓公を脅迫することで失地を回復し、天下後世に名をとどろかせた人物」として描かれている。また、十二諸侯年表や魯周公世家によれば、これは莊公一三年、すなわち西暦でいうところの紀元前六八一年に起きた出来事とされており、その二年後の前六七九年に齊は覇者の国となっている。そのため、齊太公世家や管晏列伝、太史公自序などでは、曹沫のエピソードを「桓公が脅迫による盟約ですらきちんと履行したことで天下の信用を獲得し、それがのちの覇業につながった」という文脈でも扱っており、くわえていったんは盟約を破棄しようとした桓公を管仲が諫めることで、桓公が覇者たりえたのが管仲の功績であったことを強調している。

## ②『左伝』・『国語』にみえる曹沫像

では、つぎにもっとも史実性の高い『左伝』をみると、まず曹沫が桓公を脅迫したという前六八一年に相当する莊公一三年の記述には、曹沫の名どころか齊の桓公を脅迫したという事件すら記されていないのである。

經十有三年。春。齊侯・宋人・陳人・蔡人・邾人會于北杏。夏。六月、齊人滅遂。秋。七月。冬。公會齊侯盟于柯。傳十三年。春。會于北杏、以平宋亂、遂人不至。夏。齊人滅遂、而戍之。冬。盟于柯、始及齊平也。宋人背北杏之會。(經十三年。春。齊侯・宋人・陳人・蔡人・邾人が北杏で会した。夏。六月、齊人が遂を滅ぼした。秋。七月。冬。莊公は齊侯と柯で盟を結んだ。伝十三年。春。北杏で会し、宋の乱を平定したが、遂人は来なかった。夏。齊人は遂を滅ぼし、そこを守った。冬。柯で盟約を交わし、齊とはじめて和平を結んだ。宋人が北杏の会に背いた。)

くわえて『史記』では魯が「遂邑之地」を献上することで齊と和平を結ぼうとしているように遂は魯の土地として扱われているが、『左伝』では齊が遂を滅ぼしているように、このとき遂はそもそも魯の土地ではなかった。また、『史記』では曹沫が桓公を脅迫した舞台となっている柯の盟については『左伝』にも記述があり、これによって齊と魯がはじめて講和したことが述べられているように、『左伝』でも魯は前六八一年に柯の盟を結ぶまで齊と交戦状態にあったことになって

いる。しかし『左伝』莊公十年のつぎの記述にあきらかなように、このとき魯は齊に連敗していたのではなく、むしろ勝利をおさめていたのである。

傳十年。春。齊師伐我、公將戰、曹劌請見。其鄉人曰、肉食者謀之、又何間焉。劌曰、肉食者鄙、未能遠謀。乃入見。問何以戰、公曰、衣食所安、弗敢專也、必以分人。對曰、小惠未徧、民弗從也。公曰、犧牲玉帛、弗敢加也、必以信。對曰、小信未孚、神弗福也。公曰、小大之獄、雖不能察、必以情。對曰、忠之屬也、可以一戰。戰則請從。公與之乘、戰于長勺。公將鼓之、劌曰、未可。齊人三鼓、劌曰、可矣。齊師敗績。公將馳之、劌曰、未可。下視其轍、登軾而望之曰、可矣。遂逐齊師。既克公問其故、對曰、夫戰勇氣也。一鼓作氣、再而衰、三而竭。彼竭我盈、故克之。夫大國難測也、懼有伏焉、吾視其轍亂、望其旗靡、故逐之。(春。齊軍が我が国に攻めいったので、莊公が戦おうとしたところ、曹劌が謁見を求めてきた。かれの同郷の人間が「肉を食べることのできる(高貴な)方々が対策を立てておられるのだから、(おまえの)出る幕はない」というと、曹劌は「肉食をする人たちは見識が狭いから、遠い将来まで考えた謀略をめぐらすことはできない」といって、謁見した。(曹劌が)「なにをよりどころに戦うおつもりでしょう」とたずねると、莊公は「衣食は身を養うものであるが、思い切って独り占めせずに、かならず人々に分け与えておる」といった。(曹劌が)「(そのように)小さな恩恵では広く行きわたりませんから、民はしがいけません」とこたえると、莊公は「(祭祀に用いる)犠牲や玉帛には(必要以上のものを)加えず、かならず真心をもっておこなっておる」といったが、(曹劌は)「(そのように)小さな誠意では、神のご加護は得られません」とこたえた。莊公が「大小を問わず裁判では(真相を)見抜けなくても、かならず実情を把握し誠実に対処しておる」というと、(曹劌が)「(そうした)誠意があたりでしたら、一戦することができます。戦になりましたら従軍させてください」とこたえたので、莊公はかれを戦車に同乗させ、長勺で(齊軍と)戦った。莊公が太鼓を打とうとすると、曹劌は「まだありません」といったが、齊人が三回太鼓を鳴らすと、曹劌は「ようございます」といった。齊軍は大敗した。莊公が敗走する齊軍を追いかけてようとすると、曹劌は「まだありません」といったが、(戦車から)下りて齊軍の轍を観察し、戦車のまえの横木に登って齊軍を眺めみると、「ようございます」といって、とうとう齊軍を追撃した。勝利をおさめたのちに莊公がそうした行動の理由をたずねると、(曹劌は)「戦というものは勇氣(によって決まるもの)でございます。ひとたび太鼓をうち鳴らせば(士氣は)奮い立ちますが、ふたたび(鳴らせば)衰え、またたび(鳴らせば)尽きはててしまいます。敵軍(の士氣)が尽きたところに我が軍(の士氣)が満ちましたので、勝てたのです。大国というものは測りがたいものですから、伏兵があることを危ぶんだのですが、齊軍の轍が乱れていることを確認し、齊軍の旗が倒れているのを見て、追いかけたのです」とこたえた。)

ここにいう曹劌が曹沫であることははじめに述べたとおりだが、そのすがたは

『史記』のような勇猛果敢ないっぽうで斉に敗戦をかさねた戦下手な人物とはほど遠く、むしろ冷静沈着に魯を勝利に導く「賢人」として描かれている。『史記』の曹沫は「勇力」をもって莊公に仕えていたが、『左伝』の曹沫は勇ではなく智によって莊公に仕えていたのであり、そのことは『左伝』莊公二三年のつぎの記述からもあきらかである。

傳二十三年。夏。公如齊觀社、非禮也。曹劌諫曰、不可。夫禮所以整民也。故會以訓上下之則、制財用之節、朝以正班爵之義、帥長幼之序、征伐以討其不然。諸侯有王。王有巡守、以大習之。非是君不舉矣。君舉必書。書而不法、後嗣何觀。（夏。莊公が齊に社を觀に行ったが、（これは）礼に合していない。曹劌は諫めて「なりません。そもそも礼というものは民を秩序づけるためのものなのです。ですから（諸侯の）会合では上下の道理にしたがい、貢賦の標準をさだめ、朝廷では爵位の儀式をただし、長幼の序にしたがい、征伐でもってそのようにしないものを討伐するのです。諸侯は朝聘し、王は巡守することで、おおいに会合や朝廷で定めた教命を復習するのです。こうしたこと以外は君主のおこなうものではございません。君主の行動はかならず（史官によって）書き記されます。記録にのこしても（それが）法度に合わないものであれば、子孫はなにを参考にすればいいのでしょうか」といった。）

莊公が社を觀に齊へ行ったことは『史記』でも十二諸侯年表や魯周公世家に記されているが、そのいずれにも曹沫は登場せず、『史記』中の曹沫は一貫して勇力の士のすがたをしている。しかし『左伝』の曹沫はそれとはちがって、君主を諫める賢人としての役割を担っており、『史記』にみえるような刺客としての要素は片鱗ももっていない。また、『左伝』とともに『春秋内伝』・『春秋外伝』とならび称される『国語』にも魯語上に曹沫のエピソードが載せられているのだが、それは『左伝』とほぼ同じ内容であって、『国語』においても曹沫はやはり賢人のすがたをしているのである。

### ③『管子』・『呂氏春秋』にみえる曹沫像

では、その他の文献にみえる曹沫はいったいどのようなすがたをしているのかというと、まず『管子』大匡にはつぎのように記されている。

四年。脩兵、同甲十萬、車五千乘、謂管仲曰、吾士既練、吾兵既多。寡人欲服魯。管仲喟然嘆曰、齊國危矣。君不競於德而競於兵。天下之國帶甲十萬者不鮮矣。吾欲發小兵以服大兵、內失吾眾、諸侯設備、吾人設詐。國欲無危、得已乎。公不聽、果伐魯。魯不敢戰、去國五十里而為之關、魯請比於關內以從於齊、齊亦毋復侵魯。桓公許諾、魯人請盟曰、魯小國也、固不帶劍、今而帶劍、是交兵聞於諸侯、君不如已、請去兵。桓公曰、諾。乃令從者毋以兵。管仲曰、不可、諸侯加忌於君、君如是以退可。君果弱魯君、諸侯又加貪於君、後有事、小國彌堅、大國設備、非齊國之利也。桓公不聽、管仲又諫曰、君必不去魯、胡不用兵。曹劌之為人也、堅強以忌、不可以約取也。桓公不聽、果

與之遇。莊公自懷劍、曹劌亦懷劍、踐壇。莊公抽劍其懷曰、魯之境去國五十里、亦無不死而已。左搃桓公、右自承曰、均之死也、戮死於君前。管仲走君、曹劌抽劍當兩階之間曰、二君將改圖。無有進者。管仲曰、君、與地以汶爲竟、桓公許諾、以汶爲竟而歸。桓公歸而脩於政不脩於兵革、自圉辟人、以過弭師。(四年。武器を整備し、堅固な鎧を十万、戦車を五千乗(そろえろと)、(桓公は)管仲に「わたしの兵士はたいそう鍛えられ、武器もとても多い。わたしは魯を服従させたい」といった。管仲はため息を吐いて嘆き、「斉国はなんと危ういのでしょうか。わが君は徳を競わず戦で競おうとしておられる。天下には十万もの兵を擁する国は少ないのです。小軍で大軍を服従させようとすれば、国内の多くの人民を失うことになります。諸侯は(侵略に)そなえ、人民は詐りをなすようになります。(このような状態で)国家を危険にさらすまいとしても、どうしようもないのです」といった。桓公は聴きいれず、とうとう魯を伐った。魯は戦おうとせず、国都から五十里はなれたところに関所を作って、斉国内とおなじように斉にしたがうので、どうかこれ以上は侵略しないでほしいと願いできた。桓公が許可すると、魯人は盟約を結ぶことを求め、「魯は小国ですから、もともと帯剣しておりませんが、いま帯剣すれば、干戈を交えたとして諸侯に伝わってしまい、あなたさまにとっては(むしろ)盟をしないほうがよかったということになってしまいます。どうか武器はお持ちにならないでください」といった。桓公は「よろしい」といって、そこで従者に武器を持つことを禁じた。管仲は「なりません。諸侯があなたさまをますます忌むようになりますから、このまま退却するのがよいございます。もし魯君を弱めれば、諸侯はさらにわが君を貪欲だとみなし、のちのち戦になっても、小国はますます(防備を)固め、大国は軍備を整えますから、斉国の利益にはなりません」といったが、桓公は聴きいれなかった。管仲がさらに「どうしても魯から撤退したくないのであれば、どうして武器を用いないのですか。曹劌の人柄たるや、気が強く害悪をなすものですから、盟約という手段をとるべきではありません」と諫めても、桓公は聞く耳をもたず、とうとう(魯君と)会見した。魯の莊公はみずからふところに剣を隠し、曹劌もまたふところに剣を隠しもって、壇上にあがった。莊公はふところから剣を抜いて「魯の国境が国都から五十里の距離にあるとは、死ぬよりほかにない」というと、左手で桓公を突き刺そうとし、右手でみずから(それを)たすけて、「おなじ死ぬなら、(あなたを殺し、)あなたのまえで(わたしも)殺されましょう」といった。管仲が桓公に走りよろうとすると、曹劌は剣を抜いて桓公と管仲のあいだをさえぎり、「二君がまさに版図を改めようとしておられるのだ。出しゃばる者があってはならぬ」といった。管仲が「我が君、土地を与えて汶を境界となさいませ」というと、桓公は許諾し、汶を境界として帰国した。桓公は帰国すると政治をととのえて兵甲は整備せず、辺境の安全を保って人民を治め、過去のあやまちから戦争をやめた。)

ここでの主役は桓公と管仲であり、曹沫は脇役として登場しているにすぎない

が、話の内容そのものは『左伝』や『国語』にくらべて『史記』にすこし近づいているといえる。ただし、ここでは桓公を脅したのは曹沫ではなく莊公であり、曹翽は桓公を守ろうとした管仲に邪魔だてするなと啖呵を切ったにすぎないのだが、管仲が「堅強」な性格の曹翽を危惧しているところに莊公の行動が曹翽の献言によるものだったことが示唆されているかのようであり、実際に『管子』と比較的よく似たエピソードを伝える『呂氏春秋』貴信には、そのことがより明確に示されている。

齊桓公伐魯、魯人不敢輕戰、去魯國五十里而封之、魯請比關內侯以聽、桓公許之。曹翽謂魯莊公曰、君寧死而又死乎。其寧生而又生乎。莊公曰、何謂也。曹翽曰聽臣之言、國必廣大、身必安樂。是生而又生也。不聽臣之言、國必滅亡、身必危辱。是死而又死也。莊公曰、請從。於是明日將盟、莊公與曹翽皆懷劍至於壇上。莊公左搏桓公、右抽劍以自承曰、魯國去境數百里、今去境五十里。亦無生矣。鈞其死也、戮於君前。管仲・鮑叔進、曹翽按劍當兩陞之間曰、且二君將改圖。毋或進者。莊公曰、封於汶則可。不則請死。管仲曰、以地衛君、非以君衛地。君其許之。乃遂封於汶南、與之盟。歸而欲勿予、管仲曰、不可。人特劫君而不盟、君不知、不可謂智。臨難而不能勿聽、不可謂勇。許之而不予、不可謂信。不智不勇不信、有此三者、不可以立功名。予之、雖亡地亦得信。以四百里之地見信於天下、君猶得也。莊公仇也、曹翽賊也。信於仇賊、又況於非仇賊者乎。夫九合之而合、壹匡之而聽、從此生矣。管仲可謂能因物矣。以辱爲榮、以窮爲通。雖失乎前、可謂後得之矣。(齊の桓公が魯を伐ったが、魯人は軽々しく戦おうとはせず、国都から五十里のところに盛り土をし(て境界を定め)、齊の臣下とおなじようにしたがうことを願いできたので、桓公はそれを許した。曹翽が魯の莊公に「わが君は死んでさらに死にますか。それとも生きてさらに生きますか」というと、莊公は「どういうことか」といった。曹翽が「わたくしのことばをお聴きいれくだされば、魯国はかならず広大になり、御身はかならず安寧をえることができます。これが生きてさらに生きるということです。わたくしのことばをお聴きいれくださなければ、魯国はかならず滅亡し、御身はかならず危険と屈辱にさらされます。これが死んでさらに死ぬということです」というと、莊公は「どうか従わせてくれ」といった。そこで翌日まさに盟約を結ぼうというときに、莊公は曹翽と一緒に劍をふところに隠しもって壇上にあがった。莊公は左手で桓公をとらえ、右手で劍を抜いてみずからたすけ、「魯の国都は国境から数百里も離れていたのに、いまや国境から五十里しか離れていない。これでは生きのびようがない。おなじく死ぬのであれば、あなたのまえて殺されましょう」といった。管仲と鮑叔が進み出ると、曹翽は劍の柄に手をかけて桓公とふたりのあいだをさえぎり、「二君がまさに版図を改めようとしておられるのだ。けっして出しゃばってはならぬ」といった。莊公が「汶を境界とすればゆるしてさしあげよう。そうでなければ(あなた殺してわたしも)死にま

しょう」というと、管仲は「国土は君主を守るものであって、君主とひきかえに国土をまもるものではありません。わが君はどうかこれをお許しなさいませ」といい、そこで結局のところ汶の南を境界として、魯と盟約を結んだ。(桓公は) 帰国してから(土地を魯に) 与えまいと思ったが、管仲は「なりません。なんとしてでもわが君を脅迫して盟約を結んだ者がいたというのに、わが君がそれを知らないというのは、知恵のあることとはいえません。困難に直面したさいに(相手の要求を) はねのけることができなかったのは、勇気のあることとはいえません。許可したのに与えないというのは、誠実であるとはいえません。知恵もなく勇気もなく誠実でもない。このみつつが当てはまるようでは、功名を立てることはできません。土地を与えれば、国土を失ってしまうとはいっても信頼を得ることができます。四百里の土地でもって信義さを天下に知れわたらせるのであれば、わが君はなお得るものがあります」といった。莊公は仇敵、曹翽は賊徒である。かたきや悪人にたいしても信義をつらぬいたのであるから、ましてやそうでない者にたいしてはなおさらである。(桓公が) 諸侯を糾合して会盟を主催し、天下の秩序をただして統治したのは、ここからはじまったことであった。管仲は物事によく対応することができるといえる。恥辱を栄光に変え、進退窮まったかと思えば通じさせる。さきに失っても、あとにはとりもどしたといえる。)

このように『呂氏春秋』では莊公が桓公を脅迫したのが曹沫の策によるものであることがきちんと明記されており、ほかにも鮑叔が登場したり、汶を境界とするのが莊公の要求ではなく管仲の提言からであったり、汶は汶でも汶の南を境界としたことが述べられてあったりと、『管子』とほぼ同じ内容でありながらも細部がすこしく異なっている。また、『管子』ではこの事件をきっかけに桓公が戦争よりも内政に力をそそぐようになったことが述べられるだけだが、『呂氏春秋』では桓公がいったん約束を反故にしようとしたエピソードも盛りこまれ、管仲の諫言によって桓公がきちんと盟約を履行したことが覇業の第一歩となったとされているように、『史記』の齊太公世家や管晏列伝、太史公自序と同じ論調になっているのである。

ただし『管子』や『呂氏春秋』では桓公に刃をつきつけたのは曹沫ではなく莊公だとされており<sup>4</sup>、脅迫の舞台が柯の盟だともされていない。この点において両者よりさらに『史記』に近づいているのが『公羊伝』にみえるつぎの記述である。

#### ④『公羊伝』・『穀梁伝』・『新序』にみえる曹沫像

(莊公十三年)冬。公會齊侯盟于柯。……莊公將會乎桓、曹子進曰、君之意何如。莊公曰、寡人之生則不若死矣。曹子曰、然則君請當其君。臣請當其臣。莊公曰、諾。於是會乎桓、莊公升壇、曹子手劍而從之。管子進曰、君何求乎。曹子曰、城壤壓竟、君不圖與。管子曰、然則君將何求。曹子曰、願請汶陽之田。

---

4 『荀子』王制にも「桓公劫於魯莊」とある。



管子顧曰、君、許諾。桓公曰、諾。曹子請盟。桓公下與之盟。已盟、曹子擲劍而去之。要盟可犯、而桓公不欺。曹子可讎、而桓公不怨。桓公之信著乎天下、自柯之盟始焉。(冬。莊公は齊侯と柯で会盟をおこなった。……莊公が桓公と会合しようとする、曹子が進み出て「どのようなお考えでありますか」といった。莊公が「わたしなど生きているよりかえって死んでしまったほうがましだ」というと、曹子が「でしたらどうかわが君は齊君に立ちむかってください。わたくしめが齊の臣下に相對することを許してください」というので、莊公は「わかった」といった。こうして桓公と会合し、莊公が壇上にあがると、曹子は劍を手にしてそれにしがった。管仲が進み出て「魯君はなにをお求めですか」というと、曹子は「城壁が壊され国境が(国都のすぐそばまで)迫っているというのに、齊君はなにをご考慮されないのか」といった。管仲が「それでは魯君はなにを要求されるおつもりでしょうか」というと、曹子は「汶陽の田土を頂戴つかまつりたい」といったので、管仲は(桓公を)ふりかえって「わが君、お許しなさいませ」といった。桓公が「わかった」というと、曹子は盟約を結ぶことを要求した。桓公は壇上から下りて魯と盟約を結んだ。盟約が成立すると、曹子は劍をすててその場から離れた。盟約を脅迫するのは犯罪とすべきだが、桓公は反故にしなかった。曹子に報復することができたのに、桓公は怨みもしなかった。桓公が信義を天下にあきらかにしたのは、柯の盟からはじまったことであった。)

このように『公羊伝』では柯の盟において曹沫が脅迫をおこなったことになっており、莊公が桓公を脅迫したという記述はみあたらなくなっている。むしろ曹沫の「君請當其君。臣請當其臣」というせりふからは、『管子』や『呂氏春秋』のように莊公が桓公に刃をつきつけ、かけよる管仲を曹沫が制するシーンが彷彿とされはするのだが、莊公が武器を手にしていたり桓公に刃が向けられたりする描写はなく、ただ劍をもった曹沫が壇上にあがったことが記されるだけで、脅迫をして土地を要求したのも莊公ではなく曹沫となっているのである。そして『管子』や『呂氏春秋』では「以汶為竟」・「封於汶南」と境界を画定することで魯に土地を与えることになっていたのにたいし、『公羊伝』では「汶陽之田」という土地そのものを与えることが問題となっているように、「汶」という共通点は保持しつつも、その論点は失地の返還を要求した『史記』の論調にすこしく近づいている。このように『公羊伝』の記述は『管子』や『呂氏春秋』との類似点をなお保持しつつも両者よりさらに『史記』に似かよった内容になっているのであり、「城壞壓竟、君不圖與」という曹沫のせりふや、盟約になるや否や曹沫が武器をすててその場から離れるという演出もまた『史記』に通じるものがあるのである。

なお、『左伝』や『公羊伝』とならんで春秋三伝のひとつに数えられる『穀梁伝』もまた短文ではあるものの曹沫にかんする記述を載せており、柯の盟において曹沫が活躍したとする点、そしてそのさいに桓公が天下に信義を明らかにしたとする点など、『公羊伝』と同じ文脈で曹沫のすがたを描いているのだが、『新序』雜

事はそれよりもさらに『公羊伝』に似た記述を載せている。『新序』では曹沫を「魯大夫」としており、また盟約を反故にしようとしたのは桓公ではなくその側近であったことになっているが、その筋書きやせりふ、そして汶陽の田を要求している点は、『公羊伝』に非常によく似ているのである。

ちなみに汶というのは魯と斉のあいだに流れる河川の名であり、『左伝』にはしばしば汶河の南岸に位置する汶陽<sup>5</sup>を両国が奪いあっていたことが記されている。このことから汶陽は両国の境界に位置する地だったのであり、『管子』や『呂氏春秋』、『公羊伝』で汶や汶南、汶陽の処遇が問題となっているのも、そうした当時の実情を反映したものともみることができよう。しかし、いっぽうで『史記』ではそうした具体的な地名は挙げられておらず、ただ「曹沫が斉に負けて失った土地」というおおまかな表現がなされるだけである。こうした『史記』のような記述になるためには、まずその前段階として曹沫が斉に敗戦をかさねることが必要となるのだが、『管子』や『呂氏春秋』、『公羊伝』にそうした記述はなく、『新序』にいたってはわざわざ「大夫」として曹沫を登場させているように、そこには「将」としての曹沫像はまったくみあたらない。では、敗将としての曹沫像が『史記』以外のどのような文献にみえるのかというと、それは『淮南子』汜論訓のつぎの記述にみつけることができる。

#### ⑤『淮南子』・『鶡冠子』にみえる曹沫像

昔者曹子爲魯將兵、三戰不勝、亡地千里。使曹子計不顧後、足不旋踵、刎頸於陳中、則終身爲破軍擒將矣。然而曹子不羞其敗、恥死而無功。柯之盟揄三尺之刃、造桓公之胷、三戰所亡一朝而反之、勇聞于天下、功立於魯國。(むかし曹子は魯の將兵となり、三回戦ったが勝てず、千里の地をうしなった。もし曹子があとのことを考えず、撤退せずに、陣中で首を刎ねていたら、一生ずっと戦争に負けてとらえられた將軍のままだったのである。しかし曹子は敗北を恥とせず、功績のないままに死ぬことを恥と考えた。柯の盟で三尺の刀劍をふるい、桓公の胸につきつけ、三戦して失ったものを一度にとりもどしたことにより、勇敢さが天下に知れわたり、功績は魯国にうち立てられたのである。)

ここでの曹沫は、敗戦の将として描かれつつも、その失態を恥じて死を選ぶのではなく、生きながらえて大功をうち立てた人物として賞賛されている。この記述は『史記』の魯仲連列伝と非常によく似ており、また『鶡冠子』世兵にも同様の曹沫像がみえるのだが、『淮南子』のばあいにはさらにこのつづきに管仲にたいする論賛を載せており、『鶡冠子』よりもさらに魯仲連列伝に似た構造をしている。

戦国時代の人物である魯仲連の列伝になぜ春秋時代の人物である曹沫が登場す

---

5 一般に「陽」という字は河川のばあい北岸を指すが、『水経注』巻二四に「汶水又西南逕魯國汶陽縣北」とあるように、汶陽は汶河の南岸に位置している。

るのかというと、戦国後期に斉の田単が燕の聊城を攻めたさいに、魯仲連が聊城を守る燕の將軍に撤退するか降伏するかの二者択一を勧めるというエピソードのなかで、曹沫や管仲の故事が引用されているからなのだが、それとはほぼ同じエピソードが『戦国策』齊策六にも収録されており、そこで語られる曹沫像も魯仲連列伝のそれとまったく同じである。

#### ⑥『戦国策』にみえる曹沫像

『戦国策』では、齊策六のほかにも齊策三に、

曹沫之奮三尺之劍一軍不能當、使曹沫釋其三尺之劍、而操鋤鋤與農夫居壠畝之中、則不若農夫。故物舍其所長之其所短、堯亦有所不及矣。(曹沫が三尺の劍をふるったら、一軍をもってしても敵いませんが、曹沫にその三尺の劍をすてさせ、鋤や鋤をもたせて農夫と田畑のなかにおらせたら、農夫にも敵いません。だからものごとにおいてその長所をすておき短所をもちいるようでは、堯ですらできないことがあるのです。)

燕策三に、

誠得劫秦王、使悉反諸侯之侵地、若曹沫之與齊桓公、則大善矣。則不可、因而刺殺之。(もし秦王を脅迫して、曹沫が斉の桓公にやったように、諸侯からうばいとした土地をすべて返却させることができれば、最善でございます。もしできなければ、すぐにかれを刺殺するのです。)

と曹沫にかんする記述があるのだが、燕策三のものは燕太子丹が荊軻を説得するさいに述べたせりふの一部であり、刺客列伝にみえる荊軻のエピソードにも同様のせりふが登場する。齊策三のほうはほかに類例をみつけられなかったものの、これは魯仲連が孟嘗君に語ったせりふであり、ここにいう「三尺之劍」は『淮南子』にいう「三尺之刃」に通じるものがあるだろう。

そもそも『管子』や『呂氏春秋』では莊公も曹沫もふところに劍をかくして壇上にあがっており、『史記』でも曹沫の得物は「匕首」、つまり懷劍となっているように、桓公に刃をつきつけるには丸腰をよそおって油断させ、敵意のないふりをして近づく必要がある。もし曹沫が三尺もの長劍を手にしていたら、すぐに事が露見し、桓公に近づくどころか壇上にあがることすらもできなかったであろうが、ではなぜそうした矛盾もかえりみずに、曹沫が三尺の劍をふるうという描写がなされたのか。これについては游侠の語源にたいする宮崎市定氏の考察が示唆的である。

氏によると、中国古代では日本の江戸時代のように士には帶劍の権利が与えられており、士のなかで困窮した者は、勇力者の食客となるか国家の官吏となるほかに、博徒として生計をたてるしかなかった。そして劍の同義語として「鋏」という字をつかう例があることから、游侠の「侠」をこの「鋏」に関係するものとみて、「鋏」つまり劍を帯びる者が「侠」と呼ばれること、あたかも日本で「長

脇差」を帯びた者が「長脇差」と呼ばれたごとくであり、現在「游侠」ということばがもっぱら博徒を指すものになっているのもこうした経緯に由来するのだという<sup>6</sup>。つまり剣を帯びることは士であり侠客であることのあかしなのであり、『史記』高祖本紀の、

吾以布衣提三尺劍取天下。此非天命乎。(わしは庶民の身でありながら三尺の剣をひっさげて天下をとったのだ。これが天命でないことがあろうか。)

という劉邦のせりふからすれば、『淮南子』や齊策三にみえる「三尺之刃」や「三尺之劍」が曹沫を俠者としてみせるための小道具であったことはうたがうべくもない。剣は剣でも三尺の長剣であることが特別な意味をもつことは、のちに「三尺」だけで剣を意味するようになることからあきらかである<sup>7</sup>。

宮崎氏がすでに指摘するように、『史記』には刺客列伝と游侠列伝が併存しているが、刺客はその行為とそれにとまなう結果が特殊であるというだけで、本質的には游侠と同質の存在である<sup>8</sup>。したがって三尺もの長剣を手になしている曹沫は、俠者であると同時に刺客なのであり、そこには『左伝』や『国語』にみられたような賢人としてのおもかげは存在しない。齊策三の「曹沫之奮三尺之劍、一軍不能當」という表現からは、敗軍の将とはまた異なる曹沫像が描きだされるが、いっぽうでそのすがたは刺客列伝に「勇力」と表現された曹沫に通じるものである。

#### ⑦『孫子』にみえる曹沫像

刺客列伝以外に「勇」をもって曹沫が語られるものとしては、『孫子』九地の、  
吾士無餘財非惡貨也。無餘命非惡壽也。令發之日、士卒坐者涕沾襟、偃臥者涕交頤。投之無所往者、則諸・劇之勇也。(わが兵たちは余財をないがしろにするからといって財貨をきらっているわけではない。余命をないがしろにするからといって長寿をいやがっているわけではない。出陣を発令すれば、坐っている士卒は涙で襟を濡らし、仰向けに寝ている者は涙がおとがいをつたうのである。かれらをどうしようもない窮地に投入してこそ、専諸や曹劌のような勇猛さ(をみせるの)である。)という記述が挙げられる。ふつうの兵士は退路のない絶体絶命の窮地に立たされることでようやく曹沫たちのような勇猛さをみせるというからには、そこから浮かびあがる曹沫像はみずからの命もかえりみずに桓公を脅迫した刺客のすがたをしており、そのことはかれとともに専諸の名が挙げられていることから裏づけ

6 宮崎市定「游侠に就いて」(初出は『歴史と地理』34巻4・5合併号(1934年)だが未見。『宮崎市定全集』5(岩波書店、1991)に再録)。

7 『漢書』巻一下高帝紀「吾以布衣提三尺取天下。(師古曰、三尺、劍也。下韓安國傳所云三尺亦同、而流俗書本或云提三尺劍、劍字後人所加耳。)」

8 注2前掲書、「刺客列伝」。

られる。専諸は伍子胥とのちに呉王闔廬となる呉の公子光のために呉王僚を殺害したとして、刺客列伝では曹沫のつぎにそのエピソードが載せられており、『左伝』でも『史記』と同様に刺客として描かれている人物である。

なお、銀雀山漢墓から出土した「孫子」にもこれとほぼ同じ文章がのこっているのだが、このほかにも出土史料では上海博物館蔵戦国楚竹書（以下、上博楚簡）に曹沫の名をみつけることができる。

#### ⑧ 上博楚簡「曹沫之陳」・『慎子』にみえる曹沫像

上博楚簡のなかには曹沫と莊公の問答形式をとった「曹沫之陳」と題された文章があり、「中国古代の基礎史料」研究班の案によれば、その内容は、莊公が大鐘を作ろうとする件、陣立てなどを問う件、みつつの和を問う件、戦いの極意を問う件、いつつの幾を問う件、よつつの復戦を問う件、攻め上手と守り上手を問う件、戦いのみつつの心得を問う件、親・和・義のやりかたを問う件、先王の道にこだわる件という十のパートにわけることができる<sup>9</sup>。また、冒頭の、

魯莊公將爲大鐘、型既成矣、曹沫入見曰、昔周室之邦魯、東西七百里、南北五百、非山非澤、七有不民。今邦彌小、而鐘愈大。君丌圖之。（魯の莊公が大きな鐘をつくろうとし、鑄型がすでに完成したところ、曹沫は参内して「むかし周の同姓の国であった魯は、東西に七百里、南北に五百里（もある広大な国家で）、山地であろうと沼地であろうと、（魯の）民とならないものはございませんでした。いま国土はますます小さくなっているのに、鐘はますます大きくなろうとしております。わが君におかれましてはどうかこのことをご考慮くださいませ」といった。）

という部分が『慎子』の逸文に一致することが廖名春氏によって指摘されているが<sup>10</sup>、そのほかの部分は伝世文献には類例をみつけられないものであり、内容の大半が軍事にかんするものであることから、李零氏はこれを兵法書ととらえ、曹沫を軍事家とみなしている<sup>11</sup>。しかしながら、君主を諫めたりその問いかけに答えたりしている点は『左伝』や『国語』にみられる賢人としての曹沫像に通じるものがあり、そこには『史記』にみられるような「勇力」かつ敗軍の将、そして刺客としての曹沫像は微塵もみあたらないのである。

このように『史記』によって刺客としての曹沫像が確立されるまでには、じつはさまざまな曹沫像が存在していた。そして、本章でひとつひとつ確認してきたように、こうした各種の曹沫像は、それぞれ異なりながらも、いささかの共通点をもっているのである。では、これらの曹沫像は、それぞれどのように関わりあいながら変化していったのだろうか。次章ではその変遷について考察することに

9 「中国古代の基礎史料」研究班「読上海博物館蔵楚簡札記（七）」（『日古』第21号、2013年）。

10 注1 前掲論文。釈文は注1 前掲書、243～244頁にならう。

11 注1 前掲書、241～242頁。

より、刺客としての曹沫像が形成されていった過程をあきらかにしてみたい。

## 二、曹沫像の変遷

第一章冒頭で述べたように、上掲の史料には成書年代が確定しないものが多いのだが、ひとまずわかりうる範囲で各史料の成立について述べておくと、まずもっとも古くまでさかのぼれるのが戦国中期に比定される『左伝』である<sup>12</sup>。『左伝』とほぼ同じ曹沫像を伝える『国語』は戦国後期にあたる前三世紀なかばごろの作品とされるが<sup>13</sup>、『左伝』・『国語』と同様に曹沫を賢人として扱う『慎子』は戦国中期後段に斉の宣王のもとで稷下の学士として活躍した慎到の著作とされており、ちょうど『左伝』と『国語』の中間に位置づけることができる。ただし『史記』巻七十四孟子荀卿列伝には「慎到著十二論」とあるいっぽうで、『漢書』卷三十芸文志には「慎子四十二篇」とあるように、『慎子』には後人の増補が多いことがうたがわれるのだが、『慎子』と類似した記述を載せる「曹沫之陳」は非発掘品であるためその史料的価値にはさまざまな問題がつきまとうものの、ひとまず現在では戦国後期の竹簡として研究がすすめられている<sup>14</sup>。

『呂氏春秋』・『淮南子』・『史記』・『戦国策』・『新序』は制作者ないし編纂者が判明しており、『呂氏春秋』は戦国末期、『淮南子』は前漢前期から中期、『史記』は前漢中期、『戦国策』・『新序』は前漢後期にそれぞれ比定できる。ただし、『史記』よりもあとに編纂された『戦国策』や『新序』に『史記』が成立する以前からすでに存在していたエピソードが収録されているように<sup>15</sup>、書籍の成立年代とエピソードの成立年代はかならずしも一致するわけではないし、『慎子』と同様に後人の加筆が認められる部分があることにも注意が必要である。その点、『孫子』は銀雀山漢墓から出土した「孫子」に曹沫にかんする同様の記述があることから、すくなくとも『孫子』にみえる曹沫像は銀雀山漢墓の下葬年代である前漢武帝期にはすでに存在していたといえる。そのほか、『管子』は管仲の名を冠しているだけで実際には戦国から漢初にかけての作品とみられており、『鶡冠子』もまた原形は同時期にすでに成立していたというのが、曹沫の登場する世兵篇は賈誼以降に記されたものである可能性が高いという<sup>16</sup>。また、『公羊伝』の成書年代は前漢景帝期を下限とし、その『公羊伝』とよく似た事件をとりあげる『穀梁伝』は宣帝期が成書年代とされている<sup>17</sup>。

12 吉本道雅「左伝成書考」、『立命館東洋史学』第25号、2002年。

13 吉本道雅「国語小考」、『東洋史研究』第48巻第3号、1989年。

14 馬承源主編『上海博物館藏戦国楚竹書（一）』上海古籍出版社、2001年。

15 同注3。

16 大形徹「『鶡冠子』の成立」、『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第31巻、1983年。

ではつぎに前章で確認した各エピソードを整理してみると、まず桓公を脅迫するシーンがないものとあるものとに分けられる。すなわち、前者が『左伝』・『国語』・「曹沫之陳」・『慎子』、後者が『管子』・『呂氏春秋』・『公羊伝』・『新序』・『淮南子』・『鶡冠子』・『戦国策』・『史記』であり、『穀梁伝』と『孫子』には脅迫シーンがないものの、脅迫があったことが前提とされた記述であるため、これらも後者にふくめられる。また、後者のグループはさらに脅迫の主体が莊公か曹沫かで細分することができ、前者には『管子』・『呂氏春秋』が、後者には『公羊伝』・『新序』・『淮南子』・『鶡冠子』・『戦国策』・『史記』が分類される。『穀梁伝』・『孫子』には明白な記述がないものの、内容からすればこれも後者に分類できるだろう。

以上をまとめてみると、

A 脅迫シーンがないもの…『左伝』・『国語』・「曹沫之陳」・『慎子』

B 莊公が脅迫をおこなうもの…『管子』・『呂氏春秋』

C 曹沫が脅迫をおこなうもの…『公羊伝』・『穀梁伝』・『新序』・『淮南子』・『鶡冠子』・『孫子』・『戦国策』・『史記』

となるが、Aで描かれる曹沫像は諫言により君主をただしい方向にみちびく賢人のすがたをしており、そこには刺客としての曹沫像は片鱗も存在しない。いっぽうBに描かれる曹沫像は賢人というよりも気骨の策士といった態であり、『管子』に「曹劇之為人也堅強以忌」、『呂氏春秋』に「曹翺賊也」とあるように、むしろ悪い評価を与えられている。こうした曹沫像をひきずっているのが『公羊伝』や『新序』であり、両者ともに曹沫を「可讎」と評しているように、やはりかれに悪評を加えているのである。『公羊伝』との類似でいえば『穀梁伝』もまたおそらくはそうした曹沫像をふまえているのだと思われるが、これらと同じCに属する『淮南子』・『鶡冠子』・『戦国策』・『史記』に描かれる曹沫像は、気骨の士であるという点は変わらないものの、斉に敗戦をかさねた將軍というまたべつの要素を加味されている。しかも小さな恥にとらわれず、みずからの命もかえりみずに国難を救い、大功をうち立てた英雄として描かれているように、その評価は一転して好いものになっているのである。『孫子』については記述が短すぎてはっきりとはしないが、専諸と並列させられていることからすれば、『史記』と同様の観点なのだと考えられよう。

各史料の成書年代には不確かな点がありはするものの、Aに分類される史料はいずれも戦国後期以前には存在していた可能性があるものであり、賢人としての曹沫像は当時からすでに存在していたものとみることができる。ついで戦国末期に比定される『呂氏春秋』の記述ではすでにこうした賢人としての曹沫像は失われており、戦国から漢初にかけての作品とされる『管子』でもそれは同様であるが、

---

17 野間文史『春秋学 公羊伝と穀梁伝』（研文出版、2001年）、第3章・第5章。

『管子』はそもそも管仲の名を冠しているように齊の稷下の学士に連なる史料とされるし、『呂氏春秋』の当該箇所も管仲を賞賛するエピソードであることからすれば、齊系の伝承ではそもそも曹沫は賢人ではなく「忌」や「賊」といわれるようなすがたをしていたのかもしれない。ただし、『管子』や『呂氏春秋』、それに『公羊伝』や『新序』の曹沫像は、悪評を受けているとはいえ、魯のたちばからすれば国難を救う気骨の策士といったすがたをしており、そこにはまだ賢人としての曹沫像がすこしながらも存在しているように思われる。それが一転して敗軍の将となるのは成書年代が漢代にくだる史料においてであり、そうした史料のなかにも古いエピソードが存在している可能性はもちろんあるものの、成書年代が戦国期にまでさかのぼりうるA・Bにはみられない曹沫像であることからすれば、敗軍の将としての曹沫像はわりあい新しいものだと考えることができる。

こうした各種の曹沫像をまとめてみると、

- a 賢人としての曹沫…『左伝』・『国語』・「曹沫之陳」・『慎子』
- b 気骨のある策士だが、脅迫をしたとして悪評を受ける曹沫…『管子』・『呂氏春秋』・『公羊伝』・『穀梁伝』・『新序』
- c 勇猛果敢でありつつも敗軍の将だが、のちに大功をうち立てたとして賞賛される曹沫…『淮南子』・『鶡冠子』・『孫子』・『戦国策』・『史記』

となるが、これをA・B・Cと比較してみると、A・aがやや特異であるいっぽう、BとC、bとcは、それぞれ『公羊伝』・『穀梁伝』・『新序』を過渡期として通じあっているらしいことが浮かびあがってくる。そこで、

- ①『左伝』・『国語』・「曹沫之陳」・『慎子』
- ②『管子』・『呂氏春秋』
- ③『公羊伝』・『穀梁伝』・『新序』
- ④『淮南子』・『鶡冠子』・『孫子』・『戦国策』・『史記』

と分類してその変化を追ってみると、まず①では齊の侵略に魯が勝利していたはずが、②ではむやみに応戦せず、降伏するふりをして桓公を脅迫し、魯に有利になるよう国境を画定することで齊を退けたことになっており、③ではさらに齊の侵略によって窮地に立たされた魯が、柯の盟で桓公を脅迫し、齊から土地を獲得したことになる。しかも②ではまだしも莊公が桓公を脅迫していたのにたいし、③では臣下の立場にある曹沫が国君の地位にある桓公を脅迫したことになる。君臣の秩序をくつがえす事態にまでなっているのである。そのため②や③の曹沫は悪評されているのだが、そうした評価が一転するのが④においてであり、そこではそもそも齊の侵略云々は関係なく、ただ曹沫が齊に負けたというところからはなしがはじまっている。

この曹沫の敗戦について、各史料は「三」という数字を挙げてそれを表現しているのだが、この「三」を手がかりにしてみると、なぜ④でいきなり曹沫に敗戦



の将というキャラクターが附加されるようになったのかがみえてくる。というのも、『韓詩外伝』巻十には、④といくつか共通点のみられるエピソードがのこっているのである。

傳曰、卞莊子好勇、母無恙時三戰而三北。交游非之、國君辱之、卞莊子受命顔色不變。及母死三年、魯興師、卞莊子請從、至見於將軍曰、前猶與母處、是以戰而北也、辱吾身。今母沒矣、請塞責。遂走敵而鬪、獲甲首而獻之曰、請以此塞一北。又獲甲首而獻之、曰請以此塞再北。將軍止之曰、足。不止、又獲甲首而獻之、曰請以此塞三北。將軍止之曰、足。請爲兄弟。卞莊子曰、三北以養母也。今母歿矣、吾責塞矣。吾聞之、節士不以辱生。遂奔敵、殺七十人而死。君子聞之曰、三北已塞責、又滅世斷宗、士節小具矣、而於孝未終也。(言い伝えによると、卞莊子は武勇を好んでいたが、母親が息災のときには三回戦って三回とも敗走した。友人たちはかれを非難し、国君もかれをあなどって評価しなかったが、卞莊子は命令を受けても顔色を変えなかった。母が死んで三年の喪があげたとき、魯が戦争をするというので、卞莊子は従軍を願いようと、將軍に拝謁して「以前はまだ母と暮らしておりましたので、戦っても逃げて、我が身を辱めておりました。いま母は亡くなってしまいましたので、どうか責任を果たさせてください」といった。そして敵に向かって行って戦うと、兵士の首級をあげて献上し、「これでもって一回目の敗北をつぐなわせてください」といった。さらに兵士の首級をあげて献上すると、「これでもって二度目の敗北のつぐないとさせてください」といった。將軍はかれをひきとめて「十分だ」といったが、とどまることなく、さらに兵士の首級をあげて献上し、「これで三度目の敗走のつぐないとさせてください」といった。將軍はかれをひきとどめ、「もう十分だ。どうか兄弟の契りを交わさせてくれ」といったが、卞莊子は「三回敗走したのは母を養うためでした。いま母は亡くなり、わたしは責任を果たしました。わたしはこう聞いております、節士は命をけがすことはしないと」といい、とうとう敵陣に走っていくと、七十人を殺して死んだ。君子はこれを聞いて「三回敗走したことの責任はすでに果たしたのに、さらに家を断絶し血筋を絶やすとは、士たるものの節義はわずかにそなわっているだけで、孝行という点においても完全ではない」といった。)

『韓詩外伝』は前漢前期に韓嬰によって著されたものであり、『漢書』卷三十芸文志には「韓外傳六卷」とあるいっぽうで『隋書』卷三十二經籍志一には「韓詩外傳十卷」とあることから、後人の加筆も考慮する必要があるものだが、これと同様の記述は『新序』義勇にも確認することができる。卞莊子は魯人であり、斉軍に忌避されるほど勇猛な人物として『論語』や『荀子』にもその名がみえるが<sup>18</sup>、それとはべつに『韓非子』五蠹には、『韓詩外伝』の卞莊子のように、三回戦って三回とも敗走しながらも親孝行のために生きのびた魯人のエピソードがのこっている。

魯人從君戰、三戰三北。仲尼問其故、對曰、吾有老父、身死莫之養也。仲尼以為孝、舉而上之。以是觀之、夫父之孝子、君之背臣也。(魯人が国君にしたがい戦うも、三回戦って三回とも敗走した。仲尼がそのわけをたずねると、「わたしには老いた父がおりますので、わたしが死んでしまったら養う者がいなくなります」とこたえた。仲尼はかれを孝行者だとして、(朝廷に)推挙して昇進させた。このことから考えるに、父親にとって孝行な子というのは、君主にとっては逆臣である。)

五蠹篇は韓非の自著に近いことが指摘されるものであり<sup>19</sup>、おそらくはこの孝子と卞莊子とが結びついてうまれたのが『韓詩外伝』や『新序』にみえるエピソードだったのだと考えられる。そしてそこにさらにかれらと同じ魯人である曹沫が加えられた結果、④にいうような曹沫像が誕生したのではないだろうか。『韓詩外伝』や『新序』には、たんに魯人というだけでなく、主人公が「勇」をもって語られる人物であること、「三戰而三北」していること、また敗走をそしられようがそれを恥とせず生きながらえ、非難されたり低い評価を与えられたりしても「顔色不變」であったことなど、④との共通点がちらほらみうけられるのだが、なにより斉策三にみえるような、一軍の兵力をもってしても敵わないほどの曹沫像は、ひとりで七十人を殺害し、斉軍にさえも忌避された、卞莊子のすがたと重なるものがあるのである。

ただし、卞莊子もけっして好い評価を受けているわけではない。④において曹沫が一転して好評価をえるようになっている背景には、卞莊子とはまたべつの要素があったのであり、それはおそらくかれが『淮南子』や『戦国策』で三尺の剣をもたされていることと関係しているのだと思われる。先述のように、桓公を脅迫しようとするならば、得物は匕首などのふところにかくせる暗器であるべきで、三尺もの長剣をもつのは状況からして不自然である。にもかかわらず曹沫がわざわざ三尺の剣をもたされたのは、それが侠者のあかしであったからであり、ここにおいてかれは、同じく三尺の剣をひっさげて天下をとった劉邦のように、大功をうち立てた人物のひとりとして賞賛されるようになったのだろう。

そもそも、もっとも史実性の高い『左伝』における曹沫は賢人のすがたをしており、桓公を脅迫してもいなければ斉に敗北もしておらず、むしろ斉をうち負かした人物であった。それが⑥になるといきなり莊公が桓公を脅迫したというエピソードになっており、莊公をけしかけた曹沫が非難されるようになっているいっぽう、脅迫によって結ばれた盟約でさえも履行したとして、桓公と管仲が賞賛さ

18 『論語』憲問「子曰、若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂、亦可以爲成人矣。」

『荀子』大略「齊人欲伐魯、忌卞莊子、不敢過卞。」

19 木村英一『法家思想の研究』(弘文堂、1944)、第4章・附録。

れるようになっている。もしかするとこれは、斉が魯に敗北していた当時の実情を斉に都合よく書きかえた結果にうまれたエピソードなのかもしれないが、㉔では依然としてその論調が受けつがれており、ただし桓公を脅迫したのは莊公ではなく曹沫自身だということになっているのである。そして㉕にいたると曹沫は下莊子と融合し、さらには俠者というキャラクターをも与えられたことによって、悪評から脱して賞賛されるようになる。こうして誕生したのが刺客列伝にみえる曹沫像なのであり、そのすがたがとても史実といえるものではないことは、以上の議論からあきらかであろう。

## おわりに

曹沫のエピソードを載せる史料には成書年代が明確でないものも多く、たとえ明確であったとしても、古いエピソードを収録しているだけで、同時代の認識を伝えていない可能性もあることは上述のとおりである。しかしながら、そうした不確実性をふまえたうえで、あえて試みに曹沫像の変遷を時代の推移とともに追ってみると、aにみえる賢人としての曹沫像は戦国期にはすでに存在していたが、おそくとも戦国末期までにはbにみえるような悪評を受ける曹沫像が誕生しており、さらに前漢前期から中期にかけてcにいうような敗軍の将でありながらも賞賛される刺客としての曹沫像が形成されていったのだと考えられる。そして、bとcの中間に位置する㉔の記述では㉕ではまだ守られていたはずの君臣の秩序が破られており、㉕に挙げられる史料がいずれも戦国期まで成書年代がさかのぼりうるいっぽうで、㉔の史料は漢代に成書したものばかりであることからすれば、桓公に刃をつきつける曹沫のすがたは、漢代になってから生まれた可能性が高いということになるだろう。

『史記』に伝説やものがたりのたぐいが多く収録されていることはつとに指摘されていることであり、本稿によって曹沫のエピソードもそのひとつであったことをあきらかにしても、驚かれない方がすくなくはないのではないと思われる。しかしながら、そのようにして『史記』の虚構性をみとめつつも、いっぽうでなお『史記』から受ける先入観をもって、先秦時代の実情をみあやまっていることもまた事実である。たとえば増淵龍夫氏は、曹沫の名を挙げて春秋時代の下級武士にはすでに死をもって主に報ずる俠士の風があったことを述べているが<sup>20</sup>、本稿の議論からすれば、はたしてそうした風潮は本当に春秋時代からすでに存在していたのだろうか。氏は曹沫とともに提彌明や靈輒、督戎らの名を挙げているが、提彌明はもともと趙盾の車右、つまりボディガードを務めていた人物なのであ

---

20 増淵龍夫『中国古代の社会と国家』（弘文堂、1960年）、56頁（1996年に岩波書店から新版が出版されている）。

るから<sup>21</sup>、かれが趙盾を守って死んだことを俠士の行動としてみることはできない<sup>22</sup>。靈輒は餓えていたところを趙盾にたすけられた男であり、のちにその返礼として趙盾の兵士となりかれを守った人物であるため、その点では俠士といえなくもないが、そのために死んだとは『左伝』には書かれていない<sup>23</sup>。そして督戎も国人に懼れられるほどの勇力でもって欒盈に仕えていた人物だったが、欒盈に敵対する勢力に暗殺されたというだけで、そこに俠士としてのすがたをみてとることはできないのである<sup>24</sup>。

刺客列伝に名をつらねる五人の刺客のうち、曹沫のほかには専諸もまた『左伝』にその名がみえる人物だが、専諸のばあいは『左伝』と『史記』とでそのエピソードにあまりおおきな差異はない。ただし、それでも細部に目をむけてみると、やはり『史記』ではより刺客らしくみえるように脚色されているのであり、『左伝』にみえる専諸はそれとはすこしく異なるすがたをみせている。専諸についての考察は次稿にゆだねることにしたいが、以上のことからすれば、俠者を好む『史記』の論調にひきずられて、先秦時代をその実情とは異なる目でみてしまっている可能性は充分にありえるだろう。とくに曹沫のばあいは、桓公に刃をつきつけた刺客としてのキャラクターが成立したのは、どうやら漢代になってからだったらしいことには注意が必要である。『史記』による脚色をとりはらった結果にうかびあがる先秦時代とはいったいどのようなものなのか。それについては今後の課題としたい。

---

21 『礼記』曲礼上・鄭玄注「車右、勇力之士、備制非常者、君行則陪乘、君式則下步行。」

22 『左伝』宣公二年。

23 同前注。ただし『呂氏春秋』報更では「還門而死」と死んだことになっており、畢沅は提彌明のはなしと混同されたためだとする梁伯子の説を引いている。

24 『左伝』襄公二三年。